

**【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】**  
**2020年度 最優秀園**  
**世田谷区立希望丘保育園**

「科学する心」は直接の体験から育まれると想定して、子どもが自由に自然と触れ合う機会がもてるように、「のっばらプロジェクト」と題し、園庭の一部に新たに野原をつくるという活動に取り組みられました。子どもと相談して構想を描き、集まって欲しい生き物のためには、何を植えたらいいいのかからスタートした子ども主体の活動は、園全体の取り組みに広がりました。0歳児から5歳児まで、さまざまな自然との出会いが、子どもを介して広がっている点でも、大変有意義な実践といえるでしょう。

子どもも保育者も、近くの公園から虫を運び、実際に虫が園庭の「のっばら」という自然に住み着いてくれるように、雑草を植えたり、保護区を作ったりと様々な試行錯誤を重ねています。子どもたちの姿からは、多種の生き物をよく観察し興味を深め、自然の美しさ不思議さなどに感動し、命と向き合い、生き物の生態や自然の摂理など多くの対話的で深い学びを通じた、「科学する心」の顕著な育ちを読み取ることができました。また、子どもたちは、友達とよく相談し共に探究し、カマキリが異なる時期に誕生してしまったことなど困難や危機を、協働して乗り越えようとなりました。保育者も共同探究者として、このような、「科学する心」の育ちを丁寧に記録し振り返っています。カマキリ体内に住むハリガネムシは、日頃からよく観察しているからこそその発見であり、触っていいものかも調べてから関わるなど安全性にも留意しています。

自分たちも図鑑を作ってみたいという思いから始まった「図鑑作り」を、子どもの興味が一人一人違うことを考慮し「なんでも図鑑」にされたことも創意工夫です。自分の発見がこのような形で可視化され、周囲の人に認められる喜びが一人一人の子どもの自信となっています。そして、「なんでも図鑑」が、子どもたちの興味をさらに深掘りすることにつながりました。

また、「のっばらグラムボード」「のっばらだより」などの共通のツールにより、プロジェクトに保護者も巻き込み、またそのことが子どもたちの意識と意欲をも高めています。さらに、偶然の霧雨の中での蜘蛛の巣も写真で記録することや、デジタル顕微鏡によって皆で共有できるようにするなど、道具立ての点でもこれからの「科学する心を育てる保育」への示唆も大きい実践です。

このように、追求の深さがある事例は他にない独創性があり、豊かな自然環境を子どもが主体となって創造することが、豊かな経験につながるという、まさに実体験が「科学する心を育てる」肝であることが伝わる論文として高く評価されました。